

「子どもたちの未来と被ばくを考える会」事務局長 松浦攸吉

福島原発事故から10年、昨年は2月に講師を招いて「フクシマの現状と電気料金について」の学習会を計画していましたが、コロナ感染の影響で開催することができませんでした。会の総会についても開催できずに活動報告と会計報告をお届けすることしかできませんでした。

今年もコロナ感染が治まらず、3,11に集会を持つということは不可能だと考えざるを得ません。

しかし、福島では今、建屋内の冷却汚染水が貯蔵タンクに満杯となりお手上げの状態、汚染土が詰められたフレコンバッグは山積みとなり、事故炉の廃炉への目途も立てられず、福島へ帰れない人が4万人を超えている状態は全然改善されていません。一方、原発再稼働は、福島の事故はなかったかのように、老朽原発をも再稼働させる方向で突き進められています。

放射能は自然界に一旦放出されたら自然消滅を待つ以外にその場での被ばくを避けることはできません。

事故以降、福島では人々の放射線被ばく線量の基準が年間1ミリシーベルトから20ミリシーベルトに引きあげられてそのままになっています。

原子力発電が危険で、コスト的にも成り立たない、使用済み核燃料の処理もできていない、そのような中で国民はどのような選択をしたらよいのか、皆さん一人一人が決断を迫られています。

私たちにできることは何なのかを考えたとき、取り敢えず、原発事故を二度と起こさせないように「事故が起きる恐れのある原発を早急に止める事」以外に子どもたちを放射線被ばくから守ることはできないと思います。

これからも身近な子どもたちをできる限り放射線被ばくから守れるように会員の皆様と手だてを模索していきたいと思います。

東京電力福島第一原発事故炉



左から、上部が大破した1号機、

水素爆発を免れた2号機、

使用済み核燃料の搬出が進む3号機、

核燃料搬出を終えた4号機

=福島県大熊町の東京電力福島第一原発で、本社へリ

「おおづる」から東京新聞1月27